

復が上演される。沖縄の創世神話の中では、降臨したアマミキヨが始めて御嶽を作って海の彼方のニライ・カナイから穀物の種をもたらした。やはり沖縄の各地でも収穫後の神事の中で多く海から豊穡を与える来訪神が迎えらる。そして、アミシの御願の時にニライ・カナイの遥拝所も参拝するので、この行事の背景には新年に向かってニライ・カナイから豊穡を招き、共同体の御嶽と拝所に一年間の守護を祈願する本来の意味を込めているのではないか。つまり現行の年中行事の中にも、沖縄の伝統的な宗教世界観が潜在しているのである。

仏教とカウンセリングの接点

友久 久雄

仏教とカウンセリングの接点といえば、まずその目的が、人々の心の悩みを解決することにある。人間が他の動物と異なるところは、悩みを持つということであり、その悩みを如何に解決するかが、人間としての成長が如何なるものであるかを決定するといっても過言ではない。そしてその悩みは大きく分けて二種類ある。

一つは、生老病死など人間が生物として生を受けたことに由来する、逃れることのできない悩みである。別の表現をすれば、人間として生来性に全ての人が持つ人類共通の悩みである。また、これらの悩みは、人間の知恵や能力では決して解決できない悩みである。それ故、私たちはこれらの悩みを解決するためには、人間の能力を超えた智慧に頼るしかない。私たちはこの能力を仏の智慧といい、この智慧の理を解く教えを仏教という。

これに対してもう一つの悩みは、日常生活を営むうえで後天的に生じる悩みである。別の表現をすれば、よりよく生きようとか、より幸福になろうとする要求が満たされないことに対する悩みである。そしてこの悩みの内容は全ての人に共通するものではなく一人一人異なるものであるため、その原因を明らかにし、悩む人の考え方や生活態度を変えることにより解決できるのである。現在では、これに対する解決方法は臨床心理学すなわちカウンセリングによる場合が多い。

そこで本稿では、親鸞を開祖とする浄土真宗を仏教として、ロジャースの開発した非指示的療法をカウンセリングとしてこれらの接点および差異について検討してみたい。

まず仏教について云えば、生老病死は全ての人が持つ避けて通ることのできない悩みであり、人間を越えたものとの関係性により解決しようとするものである。すなわち自己の死の問題を解決するとともに、生きている目的や意義を明らかにするのである。これは浄土真宗における信心獲得であり阿弥陀仏との出会いである。またこの出会いは、歎異抄（十六条）に「一向専修のひとにおいては回心ということ、ただひとたびあるべし」とあるように、一生にただ一度のできごととされる。

これに対してカウンセリングにおける悩みは、この世で生活することにより生じる種々の悩みであり、その内容はある者にとつては悩みであるが、他の者にとつては悩みとならない。またこの悩みは、多くの場合人と人との関係により生じるものであり、その悩みも人（クライエント）と人（カウンセラー）との関係を通して解決できる。しかし、この悩みは一度解決され

でも、その内容を変えてまた次の悩みが生じ、その悩みはエンドレスに続くといえる。

このように、仏教とカウンセリングは、人の心の悩みを解決するという意味では、共通点はみられるが、その解決方法は、仏教は人と仏との関係に依拠するのに対し、カウンセリングは、人と人との関係を拠り所とするなど大きな差異が認められるのである。

しかし近年、第四の心理学といわれるトランスパーソナル心理学において、従来認められなかった死の問題の解決である宗教体験すなわち神秘的、不可解あるいは一般には存在しないと映っていた現象に対しても、それは多くの人々の生活において、圧倒的に現実的でときには中心的なものであることが認められるようになってきた。言葉を変えて云えば、ここに宗教と心理学すなわち仏教とカウンセリングの接点が生れたと考えられる。

核燃料発電と仏教

—— 新型動力炉命名をめぐる宗教と科学の言説 ——

工藤 英勝

新型動力炉とくに「もんじゅ」「ふげん」命名に関する仏教界および仏教学界の評価は、疑念や反対を表明していた少数者は除いて、おおむね好意的なものであった。

巷間で蔓延してきた曹洞宗の大本山永平寺とその要職者が、命名したいに何らかの関与をしたというのは、まったくの誤情報である。永平寺の貫首は命名発案者と面識すらなく、命名後の賛意が、貫首命名もしくは助言の「美談」として語られるよ

うになった。

新型動力炉三基の愛称命名の披露は、一九七〇(昭和四五年)年四月八日、大洗工学センター開所にちなんで、当時の動力炉・核燃料開発事業団(動燃)清成迪(きよなり・すすむ)副理事長が「新型動力炉の命名の趣旨」を発表している。この清成氏による発案過程にあつては、当時の動燃広報室長の証言等によれば、仏教学界および国文学界の重鎮とも事前に懇談・協議していたことが判明している。

清成氏は宮本正尊氏(日本印度學仏教學会理事長)や土岐善麿氏(国語審議会元会長)と懇談・討議しその結果、新型動力炉三基を命名している。関根氏も含む宮本氏、土岐氏いずれも浄土真宗の出身もしくは同宗派僧侶である。「常陽」の名は宮本氏からの当初提案では、阿弥陀如来の因位の菩薩名「法蔵」であつたという関根証言は驚きである。

動力炉・核燃料開発事業団『動燃二十年史』等には、命名の趣旨を「文殊、普賢の両菩薩は、知慧と慈悲を象徴する菩薩で、獅子と象に乗っている。それは巨獣の強大な力を知慧と慈悲で完全に制御している姿である。原子力の巨大なパワーもこのように制御され、人類の平和と幸福に役立つのでなければならぬ」と説明する。

国家プロジェクトによる新型動力炉事業において、政教分離原則違反が疑われかねない仏教菩薩尊像が堂々と掲載されているのは、異例中の異例である。それを実現にこぎつけたのは、発案者の清成氏の並々ならぬ熱意があつたからである。

新型動力炉の名称に関しては、その発表前後の違いはありな